

さばえ近松文学賞2017～恋話 (KOIBANA) ～

受賞作品集

受賞作品

◆近松賞 (賞金10万円、賞状、副賞)

「漆搔きの本懐」

西村 一江

山口県山口市

◆優秀賞 (賞金3万円、賞状、副賞)

「漆を繋ぐ」

朝川

圭子

福井県越前市

「父の小さな恋人」

浅野

憲治

愛知県尾張旭市

「冬薔薇」

穂山

定文

山梨県甲府市

◆佳作 (賞金1万円、賞状、副賞)

「しのぶれど音に出でにけりわが恋は」

東灘

中内

慈子

奈良県奈良市

「びいどろ風鈴」

卓哉

卓哉

埼玉県さいたま市

「冬の向こう」

秋田 恵子

福井県坂井市

「ふわり」

山本 陽子

福井県福井市

「わたしの好きな、
橙」

十川 秋

カナダ

◆松平昌親賞 学生部門（図書券1万円、賞状、副賞 ちかもんくんグッズ）

「送られることのないラブレター」

守屋 佑香

福井県福井市



特別審査員
(福井県出身)

漆掻き少年の初々しい恋

今年の近松賞「漆掻きの本懐」は、漆掻きを題材としている。恥ずかしながら漆掻きに関する知識がなかったために慌てて調べたが、越前漆器は日本の四大漆器産地、会津、山中、紀州に比べても古い産地であり、かなり盛んだったようだ。

さて作品は、漆にかぶれる漆掻きの少年が、他藩の横暴から漆の木を守るために一人立ち向かう無鉄砲さや、親方の娘との恋が初々しく描かれる。清吉が漆にかぶれる話がかわいくて、読み終えると気持ちがあっさりした。

個人的には密接した関係を築く前の二人の微妙な関係に心がときめくが、入賞作品には思わぬほろっとくる話もあるので、ぜひ読んでほしい。

「何を伝えようとしているのか」

作品は、「おもしろいかどうか」で選んだ。その上で、「何を伝えようとしているのか」と、「読み手に構成や表現を通して伝えようしているのか」を審査の観点とした。

審査では、なぜこの設定なのか、なぜこの人物を登場させたのかが話題となった。

例えば、登場した人物が死んでしまう場面でも、必然性は何か、安易な設定になっていないかどうかを話し合った。

その点では、どの作品も、構成や表現、会話に無駄がなく、優れた作品ばかりであった。どうか、この魅力的な恋話を楽しんでいただきたい。

目次

受賞作品

講評・特別審査員 桂 美人

総評・審査員長 林 哲治

「漆掻きの本懐」 西村 一江

「漆を繋ぐ」 朝川 圭子

「父の小さな恋人」 浅野 憲治

「冬薔薇」 穂山 定文

「しのぶれど音に出でにけりわが恋は」 中内 慈子

「びいどろ風鈴」 東灘 卓哉

「冬の向こう」 秋田 恵子

「ふわり」 山本 陽子

「わたしの好きな、橙」 十川 秋

「送られることのないラブレター」 守屋 佑香

掲載の受賞作品は応募に際し、送られてきた内容をそのまま掲載してあり、校正・校閲などの編集は加えておりません。

清吉は、何一つ見落とすまいと、親方の作業を真剣に目で追っていた。親方は、五十を過ぎているとは思えないしつかりとした足取りで、山の斜面を歩きながら漆の木を見極めていく。素手で幹を触り、搔く面を決め、鉋で印をつける。辺付けだ。

「印は、木の皮の表面だけに軽く付けろ。深く付けると、生漆が出てしまうからな。」
「はい。」

清吉は、親方が付けた印に顔を近づけてよく見ようとした。が、突然顔に手をやって、木から離れた。猛烈な痒みが襲ってきた。

「痒いか。」

「いえ、それ程では・・・。」

耐えながら、清吉は再び木に近づこうとした。

「無理するな。漆掻きの始まる前に、倒れても困る。」

清吉は唇を噛みしめた。我が身に腹が立った。漆の掻き子が、漆にかぶれてどうするのだ。

去年の春、十五歳で漆掻きの親方に弟子入りした。一人前になれば楽に暮らしていける、そう夢見ていたのだが現実には甘くなかった。初めから躓いた。漆にかぶれるのだ。徐々に慣れて

平気になってくる、そう言われたが、全く症状は改善しない。

「顔に手ぬぐいを巻いてみる。少しはましになる。それと、明日からは手袋をして来い。」
別の木に刃付けをしながら、親方が言った。

「はい、ありがとうございます。」

親方は、この鯖江で一番腕の良い掻き子だ。親方みたいな立派な掻き子になりたい。それが、清吉の願いだ。だが、それも望み薄かもしれない。自分がこれだけ漆にかぶれるのは、漆の木から拒絶されているからではないだろうか、そんな思いが心を過ぎった。

井戸から汲み上げた水で顔を洗っていると、後ろから声が出た。

「清吉さん。」

振り返ると、親方の一人娘の加代がいた。袂をたすきで絡げ、手桶を抱えている。

「お父から、沢蟹が効くと聞いたから。漆かぶれに。」

加代が近づいてきて、手桶を差し出した。清吉は慌てて手ぬぐいで顔を拭き、手桶を受け取った。中には、小さな青い沢蟹が何匹か入っていて、ごそごそ動いていた。

「潰して、汁を塗るといいって。」

「ありがとう。」

加代は、走って母屋に戻っていった。清吉の脛に、加代のふっくらした白い腕が焼き付いた。

親方の家の納屋で寝起きするようになって、加代とは毎日顔を合わせている。だが、いまだに清吉は、加代と会うと途端に体が硬直し、ほとんど何も言えなくなってしまう。生き生きとした黒い瞳と、可愛らしい赤い口許に心をかき乱され、頭がぼうつとしてしまうのだ。今も、せつかく沢蟹を持つてきてくれたのに、無愛想な返事しか出来なかつた。

漆にはかぶれるし気の利いた話も出来ない、俺は駄目な男だな。手桶に目を落として、清吉は納屋に入ってしまった。

梅雨に入り、漆搔きが始まった。辺付けしておいた漆の木の面に、鉋で傷を付ける。

「皮と木本体の間に傷を付けるんだ。やってみろ。」

親方に言われ、清吉は鉋を握りしめ横一文字に傷を付けた。

「そうだ、それでいい。傷を付けられ、漆は我が身を守るために樹液を出す。四、五日後に、また傷を付けると、更に多くの樹液を出す。それを繰り返すんだ。」

「はい。」

手ぬぐいや手袋で皮膚を覆っているが、やはり痒い。清吉は痒みに必死で耐えながら、とろりとした乳白色の漆を、篋でこさいで木桶に入れた。漆は、みるみる茶色に変わっていく。甘い独特な匂いが、鼻を衝いた。

「一滴も無駄にははいかん。生漆は、血と同じだ。」

「はい。」

「漆掻きは八月で終える。養生掻きだ。そうすれば木は死なず、また来年も漆が採れる。」

「はい。」

親方と清吉は、黙々と漆掻きをしていた。痒みと蒸し暑さは苦痛だが、清吉は漆掻きの仕事が好きだと心から感じた。陽が遮られ厳かな感じさえする薄暗い山の中で、漆の木と向き合い樹液を頂く。山の神と漆の木に感謝をしながら作業を続けていると、自分も、山の一部になっていくような錯覚を覚えた。

八月に、最も上質な盛り漆を採って、その年の漆掻きは終わった。

十月、山と田畑の仕事を終えた村は、秋の実りに感謝して祭りを催す。喜びに満たされるはずの時期に、不穏な情報が隣り村から舞い込んできた。江戸幕府に神社の修復を命じられたある藩が、漆が足らず他藩の領内で殺し掻きをしてまわっているというのだ。

「殺し掻きは、木が枯れるまで漆を採り尽くす方法で我が鯖江藩では御法度だ。殺し掻きをすれば、木は死ぬ。」

親方は、囲炉裏の前で腕を組んで目を閉じた。

「俺、漆の木の番をします。殺し掻きなんて、誰にもさせない。」

「連中は、夜に来るそうさ。どの日に来るかも分からない。」

「今日から毎晩、寝ずの番をします。」

「体がもたないぞ。それに、奴らは複数で手荒な真似もするらしい。」

「俺、木を守ります。」

「危ないことはするな、いいな。」

親方に止められたが、清吉はそれから毎晩山に入り漆の木の番をした。しかし何も起こらないまま、祭りの日を迎えた。

清吉は、村の衆と御輿を担いだ。いつもとは違う紅色の晴れ着を着た加代の姿を沿道で見つけた。心が熱くなり、御輿を担ぐ腕に思い切り力を込めた。その時だ。祭りに集う村人たちの中に、異質な見慣れぬ者たちの姿を見つけた。奴らだ。殺し掻きをしに来た。清吉は直感した。御輿担ぎを終え、清吉は見慣れぬ者たちを探したが、見つからない。辺りは、徐々に暗くなっていく。

山に行ったな。村人が祭りに出ている間に、殺し掻きをする気だ。清吉は駆け出した。

山に入った頃には、日は暮れていた。思った通り、人の気配がした。痒みが襲ってくる。漆の匂いが漂ってきた。漆が泣いている。清吉の心に、怒りと悲しみが同時に押し寄せて来た。

「漆を殺す気か。やめろ。」

清吉は、漆を掻いている人影に叫んだ。人影はびくりとして動きを止め、次の瞬間いきなり清

吉に躍りかかってきた。

「うっ……」

清吉は、頬に痛みを感じた。もう一度振り上げられた手に、鉋が握られているのが暗闇を透して見えた。清吉は、手刀で鉋をはたき落とした。

「この野郎。」

怒鳴り声と共に後ろから組み付かれた。清吉は相手の足を思い切り踏みつけ、両肘で突きを入れた。相手が怯んだ隙に向き直って拳を鳩尾に打ち込んだ。

「くそっ。」

二つの人影は、よろめきながら逃げていった。

「二度と来るな。」

背中に向かって大声で叫び、ほっと力が抜けた。清吉は、そのまま気を失った。

気付いた時、清吉は布団に寝かされていた。ちょうど、額の手ぬぐいを加代が替えていた時間で、目を開けると加代の顔が近くに見えた。

「気が付いたのね、良かった。」

「俺、どうやってここへ？」

「お父と村の衆が山に探しに行つて見つけたの。漆の木を守つて、倒れていたって……」

「漆は、無事？」

「ええ、大丈夫だったってお父が言ってた。」

「よかった。」

親方が部屋に入ってきた。清吉の寝ている横に座り、顔をのぞき込んだ。

「鉋を振り回す大人を相手にして負けぬとは、清吉、お前、腕に覚えがあるのか。」

「いえ。ただ、寺子屋のお師匠様から護身術を教えていただきました。お侍様のように刀は持たなくても、身を守る術を身につけておかねばならぬと言われて。」

「そうか。お前のおかげで、来年も漆掻きが出来る。」

加代が、藁草を潰したものを頬の傷に塗ってくれた。ひんやりした感触が、心地よかった。

納屋に、加代が入って来た。

「芋団子を作ったから、食べて。」

「ありがとう。」

皿を上がり口に置いて、加代は驚いた。

「あら、沢蟹が。」

先日渡した沢蟹が、水を張られた手桶の中でごそごそ動いている。

「潰して塗らなかったの？」

「何だか可哀想で。」

じっと見つめられて、清吉は下を向いた。

「加代さんが、くれたものだから。」

小さな声で、呟いた。

加代は、優しく微笑んだ。

「今から、一緒に川へ放しに行きましょう。」

「うん・・。」

二人は、両手を縁にかけて手桶をのぞき込んだ。加代の手のすぐ側にある清吉の逞しい手は、漆にかぶれて赤かった。

春田植えを終えた河和田の男達は漆掻きの出稼ぎに行く。昭和三十年代の風物だった。弥吉も十五の年から掻き子になった。

父と共に関東の山まで出向く。半年ほど農家の小屋を間借りし漆掻きに専念するのだ。

「今年も倅と二人世話になるで。頼むわ」

「もちろんいいべな。須藤さん、あがつしよ」

変わらぬ出迎えの言葉を聞くのも五年目だ。

家計を助けるため父親の手伝いを志願した弥吉であったが、今では一日でも早く独り立ちしたいと切に願っていた。

戸が開く。和盆を置き一礼した彩月と目が合う。逢いたかった漆黒の瞳だ。

今年も来たで。しばらく一緒や。

待ったったけ。ずっとそばにいたかった。

声にせずとも思いが通い合う。添い遂げるのは彩月しかない。そのためにも漆掻き修行に精を出さねばと弥吉は自分に喝を入れた。

翌朝。山稜が空との境界線になる頃、弥吉は父と漆を求め濃緑の山へ分け入っていた。

『殺し掻き』という方法で一本の木が枯れるまで、間をおいては漆の樹液を採取するのだ。

見つけた木を父が撫でる。弥吉も素手で触る。かぶれることもなくなった。自分もようやく漆に選ばれたのだと弥吉は思う。

漆カンナを木に刺し込む。父も自分を認めてくれるだろうかと横目に父を見る。変に腕に力が入ったところで待ったがかかった。

「馬鹿たれ。抉ってるだけやろ。一気に掻かんかい。漆が傷を治すために出す血の一滴やぞ。痛みの深さをよう考えんか。半人前が」

漆への念を忘れ、父への見栄だけに囚われて無造作に傷つけたことを弥吉は恥じた。

一人前になれる日など来るのだろうか。頭に浮かぶ彩月の顔が遠くなった。が、自己嫌悪に浸る間はない。掻き樽に流れ込む黒茶色の液を溢さぬよう再び漆と向かい合った。

雨が續くと漆がけない。彩月の妹にせがまれてあやとりの相手をしていると、彩月も輪に入ってきた。弥吉の手の紐に指にかける。

初夏だというのに彩月の指は赤い。母亡き後、水仕事に追われる日々を物語っている。

漆掻きで黒くなった自分の指の間を彩月の赤い指が交差する。初めて指を絡めたときは、互いの色の違いに驚いたものだ。しかし弥吉には、黒と朱色が互いを引き立て合う越前漆器と重なって見えた。後に彩月に伝えると二色で一つになるのがええねと笑ってくれた。

弥吉が河和田に帰る前夜、囲炉裏を囲み皆で雑談していると彩月の縁談の話になった。

「おらが嫁さ行ったら、困るのはおとうじや」

「だげど嫁さ行がないわけにも……」

「ほんなら、俺がここに来る」

突然の弥吉の宣言に一同は顔を見合わせた。

「弥吉さん」

一途に弥吉を見つめる彩月に大きく頷き、そのまま弥吉は彩月の父に頭を下げた。

「黙ってたこと堪忍して下さい。ずっと一緒にになりたいと思とったです。俺らの所帯をここで持たせてやってください」

「じゃが、急に聞がされでも……」

言葉を失い、目を泳がせる彩月の父に弥吉の父も頭を下げた。

「不躰な倅で申し訳ない。掻き子としても半人前のくせに、押しかけ婿になると独断宣言するとは。お二人に合わせる顔がねえ」

「いやいや、そっだからことねえ。弥吉ちゃんの誠実さはよく分がつてる。だども……」

言い淀む彩月の父に彩月もきっぱり言った。

「おとう。弥吉さんの独断じゃない。ゆくゆくは漆を育てることも考えてる弥吉さんについて行きたいと言ったのはおらだ。」

「そんなことまで……いつの間……」

戸惑う二人の父を前に弥吉が答えた。

「父ちゃん、『うるしかきの唄』知っとるやろ」

『『かわいい子をおき 妻をもおいて 行くは河和田のうるしかき』 っちゅうあれか？』

「そや。それを唄いながら母ちゃんは時々寂しそうに시켰た。彩月に同じ思いはさせとうない。でも一人前の掻き子になるのも夢や」

弥吉は大きく息を吸い込んだ。

「どや、父ちゃん。ここから二人で河和田に上質の漆を送らせてもらえんか。精魂込めて漆も育てて命を繋いでいくさけ」

彩月も弥吉の隣に座り手をついた。

「おらにも河和田の漆器を支えるお手伝いをさせてくださいよ。」

床に額をつけたままの二人を前に、弥吉の父は彩月の父に向かい改まって言った。

「倅を……もらってやってくれますか」

彩月の父もあわてて足を正した。

「こちらにとつては願ってもない話。あばさけてもええんですか？」

「俺はあばさけてなんかおらん。半端な気持ちやない。添い遂げるのは彩月しかおらん」
いきり立つ弥吉の袖の裾を彩月が引っ張る。

「あんな、『あばさける』っていうのは、こっちの言葉で『甘える』って意味だが」

「えっ」

弥吉は目を見開いた。

「そうなんか。福井じゃ、『ぶざける』って意味やから、つい、俺は……」

俯く弥吉に彩月の父が豪快に笑って言った。

「こんなに好いててくれるなら言うことはない。末永く娘を頼むでな。弥吉」

漆の樹液よりもじんわり潤み出す彩月の父の目を、弥吉はしっかりと心に刻みつけた。

半世紀はあつという間やった。

弥吉は金沢に向かう北陸新幹線の車窓を眺めながら思った。足元には漆の苗が置かれている。指折り数えて待ち侘びた帰郷の日だ。

七十を超えて少し瘦せた彩月が隣にいないのは物足りないが、故郷が近づくにつれ高ぶる気持ちは押えようがなかった。

河和田で漆器業を営み続ける友から、漆の植樹に参加しないかと誘われたのだった。中国産漆が主流になり、河和田への出荷が少なくなっていた弥吉には嬉しい誘いだった。

初孫を里に連れて行くみたいと苗の持参を提案した彩月が、今朝になって体調が優れないと言い出し一人旅になった。

流れゆく景色の速さとはうらはらに、弥吉は河和田を離れてからの日々を頭を回らせた。

身一つで来てくれという彩月の父の言葉通り、弥吉は越前の掻き道具一式と河和田の漆の苗を持って身を寄せた。彩月の父が所有する山の一角に二人で苗を植え生涯を誓った。

自分も掻き子になると彩月が言い出したのは結婚してすぐのことだった。

初めは自分が踏んだ山の枯葉の音に怯えていた彩月が今では熊蜂すら動じなくなった。

漆カンナも素早く一直線に切り込む。彩月の迷いのなさに惚れ惚れすることもある。

漆の生育にも試行錯誤が続いた。新芽につくアブラムシの防除に明け暮れた日もあった。

「漆の木は人を恋しがるから、にぎやかな方がええがね」

冗談で言っただけばかり思ったのに、彩月は七人も子供を産んだ。皆成人して村から出ていったものの、三男家族はちよくちよく帰ってきては弥吉たちの手助けをしてくれる。

在来線に乗り換え、鯖江駅に着くと友が出迎えてくれた。車に乗り漆について語り合う。

「重要文化財の修復には国産の漆が不可欠になったな。弥吉ちゃんもまだ頑張らんとな」

「そや。日本の物は日本の物で守らなあかん」

河和田の山に入り植樹に参加する。持参した苗に「大きく育て」と願い土をかけた。

帰路についた弥吉は、通りがかりの宝石店で足を止めた。『和のペアリング』と題されたポ

ップの横に、朱色と黒の漆が塗り込められているプラチナの指輪を見つけたからだ。

「表の指輪二つ、おっけの」

八百屋の買い物みたいに店員に声をかける。

「ええもん見つけた。荒れた赤い手をした女房と、漆搔きで真っ黒になったうらが重ねてきた五十年の記念にふさわしい指輪や」

「まあ。素敵です。で、奥様のサイズは？」

「分からん。普通でええ」

「畏まりました。では一般的なサイズで」

小さな紙袋を持つと、彩月と初めて出会ったときより気持ちが高ぶるのを感じた。長旅を終えて家に着くと見慣れぬ車が止まっている。なぜか背中に震えを感じる。

「あ、父さん」

三男が泣きはらした目で父を見つめる。

「なんかあったんか」

「母さんが。母さんが死んだんだ」

「なんやと。なんで知らせんかった」

「父さんが行つてすぐ倒れて。でも父さんには病院のことも何も言うなつて。今日は漆が繋がる大切な日じゃ。母さんも恩返しができるからつて。だけどまさか死んじゃうなんて」

三男はそのまま泣き崩れた。

弥吉は急いで家に入った。見慣れた座敷に見慣れぬ白い布団が敷いてある。薄化粧をした彩月が横たわっていた。

「彩月」

足が絡む。思い通りに歩めない。

「彩月、目を開けろや。指輪、買ってきたで。漆の指輪や。お前の指にはめてやるでな」
やっとの思いで布団をめくると、胸の上に組まれた両手が現れた。

彩月の指先は黒くくすんでいた。樹液のアクが染み込んだ弥吉の手と同じだった。

「でもわしの中ではお前の手は赤いままや」

弥吉は朱色の指輪を左薬指にはめようとした。硬直した指を無理に押し上げる。

「はまらん。はまらんやんか」

「父さん。仕方ないよ。母さんはもう……」

「違う。違うんや。こんなに節くれおつて。指輪がつかえてしまう。働きもん過ぎたんや」
人並み以上の苦勞をかけてしもたな。

いんや。人並み以上の幸せな人生じゃよ。

彩月の声なき声が聞こえる。最後まで思いが通い合うことがたまらなく苦しかった。

指輪が転がり落ちる。涙で視界がぼやける。

漆液のように傷を和らげるための涙なら、今は流したくないと弥吉は唇を噛みしめた。

父の六十歳の誕生日の年の年賀状のなかに、見慣れない年賀状が一枚紛れ込んでいました。幼い文字で

「明けましておめでとうございます」

と、書かれ、学区の小学校名とクラス、差出人の名前が書かれていました。これが四年三組の前田由美子ちゃんと父との最初の出会いでありました。父はよほどうれしかったのか、ていねいに毛筆で返事の年賀はがきを学校あてに書き送りました。

その年の夏には暑中見舞いが、やはり五年三組になった前田由美子ちゃんから来ました。父は、また毛筆でていねいな返事を学校あてに書き送りました。

わたしには、なぜ父に由美子ちゃんから年賀状や暑中見舞いが送られてくるのかは、分かっていたいました。小学四年になると、手紙の書き方を学校で習います。その実習として市内の六十歳以上のお年寄りに年賀状や暑中見舞いを書き送るのです。

しかし、返事を出すお年寄りの数は少ないと聞いています。なぜ私が、こんなことを知っているかという、私の息子が小学四年のとき、同じように市内のお年寄りに年賀状を書いていなのを見たからです。ふつうは、年賀状一回と暑中見舞い一回で、子供たちとお年寄りの交際

は終わるのでした。学校の教育は、そこまでなのです。

しかし、父と由美子ちゃんの場合は違っていました。翌年の正月にも由美子ちゃんからの年賀状は来ました。こんどは自宅の住所が書かれ、もうすぐ六年生になる喜びが、明けておめでとうの横の空欄に書かれていました。その年賀状は、女の子らしく何色も使った色鉛筆でデコレートされていました。

目を細めて喜んだ父は、やはり毛筆で返事を書いていました。年賀の決り文句以外になにか書き添えていたようですが、その年賀状は家族にも見せてくれませんでした。

六年生になった夏休みには、やはり美しくデコレートされた暑中見舞いが父のもとに配達されました。そのはがきいっぱいにはヒマワリの花が咲いていました。父は

「元氣な六年生であるよう願っています」

という返事に添えて、長年趣味で栽培しているいろいろなひょうたんのなかから、小さくていちばん美しい千成びょうたんを贈りました。

「そんなもの、子どもが喜ぶはずがない」

という家族の声を無視して。

中学生になる年にも、年賀状が来ました。イモ版で彫った干支の牛が、はがきいっぱいにはらみつけていました。そして短く近況が書かれていました。

父は家族に内緒で隠れて返事を書いていたようでした。そのころになると、由美子ちゃんは

父の“小さな恋人”と家族から呼ばれていましたから、恥ずかしかったのだろうと思われま
す。「おじいちゃんの“小さな恋人”から今年も年賀状が来るかしら」

と言われると、父は純情そうに顔を赤くして、

「知らんな」

と言つて、とぼけていました。心の中の待ち遠しさを隠して。

中学に進学したときには、なにか進学祝いを贈ったようでしたが、父はそれを家族には秘密
にしていました。わたしは、由美子ちゃんからの礼状でそれを知ったのです。

その年の夏の暑中見舞いの返事に添えて、父は秘蔵の一メートル近い大きなひょうたんを贈
りました。一本の苗からは一個しか収穫できないものです。そのときも家族から

「そんなもの、女の子が喜ぶはずがない。もっと喜びそうなものを贈ったら」

と、父は笑われていました。しかし、今にして思えば、ひょうたんは、父が丹精を込めて育て、
収穫し、ニスを塗り、ラッカーで磨きあげて製作した真心のこもった唯一の手作りの贈り物で
あったのでした。

その後父と父の“小さな恋人”との文通は、とぎれることなく続いていたようですが、父
が家族に秘密にするようになるにつれ、家族全員の興味からは薄れていきました。

そして、父が七十歳の年の成人の日、驚くことが起きたのです。夕刻、見慣れない、和服を
着た美しい女性が訪ねてきました。

「浅野義雄さんは、いらっしやいますか？」

と尋ねられても、一瞬だれのことか判断がつきかねました。華やかななかにも清楚な感じのするその娘さんが、前田由美子ちゃんであることに、わたしをはじめ、家族全員が驚きのあまり声も出なかったのです。

考えてみれば、最初に年賀状が来てから十年がたっていました。父は、朝からそわそわしていました。その訳がようやく分かったのです。成人の日に我が家を訪ねてくることは、父と由美子ちゃんの間では約束されていたのです。父は、恥ずかしくて、それをだれにも言い出せずにいたのです。

家族全員で父と父の“小さな恋人”のために、手分けして、あわただしく祝いの膳を整え、ほんとうに楽しい夜を過ごしました。由美子ちゃんが、父から贈られたいくつものひょうたんを、いまでも部屋のアクセサリーとして飾っているということが、父をいちばん喜ばせました。由美子ちゃんは、わたしに適当な息子がいたら、ぜひ嫁にもらいたような素直で美しい娘さんに育っていました。父は、自分の子どもたちよりも若い美しい恋人と並んで座って、人生でいちばんの幸福に酔いしれているように思われました。

四年後、由美子ちゃんは、ほんとうの恋人を見つけて結婚しました。もちろん父は招待され、披露宴に出席しました。そして帰ってくるなり

「あんな美しいお嫁さんを見たことがない」

と自慢しました。わたしにも、その美しさは充分に想像されました。

「じいさんは、これで失恋だな」

と茶化すと、花嫁の父のように、さみしそうに口を閉じてしまいました。父には、うれしさよりもさみしさのほうが大きかったのかもしれない。新婚旅行先からの絵はがきを見ても、以前のように喜びをあらわさなかったのが、なよりの証拠です。

由美子ちゃんが、夫となる人の住む福井県の鯖江市に去っていつてしまったことも、父を悲しませました。父は、それから急に老け込んでしまったのです。しかし、それから父と加藤と名字が変わった由美子ちゃんとの間には、絶えることなく文通が続いていました。

新婚生活の様子や新居の近くの行楽地の絵はがきは、以前にも増して頻繁に父のもとに配達されました。誠照寺の本堂を背にして、笑顔で写る写真が送られて来た時は、寂しそうにつぶやいているのを聞いたことがありました。

「本当に、しあわせそうだな」と。

そして

「これで子供が出来れば、言う事が無いなあ」

しばらくすると、父の願いが届いたのか、子どもが産まれたとの連絡がありました。父は孫が産まれたときのよう喜んでいました。

「いちど、鯖江に行ってみたい」

と言っていました。そのころになると少しばかりぼけが入り、体力的にもとても無理なように思われました。

七十六歳で父は死亡しました。お風呂に入り、あまり静かなので不審に思っ戸を開けてみたら倒れていました。そのとき、すでに死亡していました。ほんとうにあっけない最後でした。

医師は急性心不全と死亡診断書に書き入れましたが、母も親戚の人も、父は

「自分で湯灌をして死んだ」

と、その死にざまをうらやましがったのでした。

葬儀の日は、朝から雨が降っていました。父の“小さな恋人”は、誠実そうな夫と小さな子どもを抱いて遠い鯖江から参列してくれました。そして棺の中に、五年生のとき父から初めて贈られた、あの小さな千成びょうたんを入れてくれました。

わたしには、そのことをわたしたち身内以上に、亡くなった父が喜んでるように思われました。

クリスマススイブに都心が雪になる確率はどのくらいだろうかねなどという、たわいない話を専務の吉井としながら、六十二歳の室岡は取引先との打ち合わせから駅前デパートに向かう社用車の中にいた。二人の孫へのクリスマスプレゼントをすっかり失念していて、さつき妻にこっぴどく叱られたばかりだ。会社では強面の副社長で通っているが、恐妻家という噂も歴然としてある。前会長の娘を嫁さんにもらったんだからなという皮肉な薄笑いを、さつき吉井も浮かべていた。

携帯が再び鳴った。気短な妻からかとうんざりした表情で開くと、先生の娘さんからであった。もしやと危惧したとおり、先生の逝去の知らせであった。

室岡は母子家庭で育った。父は腕のいい植木職人であったが、酒癖が悪く、彼が五歳の時酔って川に落ち溺死した。母は眼鏡部品工場の臨時雇いであったが、病弱で休むことも多く、安い賃金でもあったので生活は厳しかった。夜も鮎屋の手伝いなどに出向き、ギリギリの生活を支えた。室岡の教科書や服は、母が頭を下げて譲ってもらった裕福な家庭の子供のものだった。給食費が期日までに払えないこともあった。小学校の高学年になるとそういう貧しさの実

感に、強い屈辱を感じるようになり、母親に辛くあたることもあった。

室岡の屈折した感情を、さりげなくサポートしてくれたのが、五年生から担任になった橋本綾子先生であった。園芸部の顧問でもあった二十八歳の先生には、メガネザルというあだ名がつけられていた。黒縁の度の強い眼鏡をかけ、ぺちやっと上向いた鼻、大きめの口、愛嬌と哀愁のあるよく動く眼と、確かに猿によく似た風貌であった。いつも地味な服装で、物静かな口調で話した。

「先生が立て替えておくから、お母さんには心配しないでつていってね」

母のお詫びの手紙を渡す室岡に、先生はその手を柔らかい指で包み込み、強く握って励ました。

室岡の住む町営住宅から三百メートルほど南にある、二階建て南向きアパートに先生は住んでいた。

「今お料理の勉強しているんだけど、試食してくれないかな」

と、日曜日には自宅によく招いてくれた。

先生の手料理は、室岡の家の貧しい食事からしたら豪華すぎるもので、料理の味以上に、先生の心遣いが感じられるものだった。

歩く距離はあったが、四季の草木が美しい西山公園にもお弁当を持って出かけた。先生は桜やツツジや紅葉を、スケッチブックに丹念にデッサンした。東京の美大で、絵画を勉強してい

たのだという。

「本当は画家になりたかったの。でもそれは田舎出のちょっと絵のうまい女の子の淡い夢でしかない、すぐ思い知らされたわ」

美大の時には映画の看板描きのアルバイトもしていたといい、裕次郎や錦之介、浅丘ルリ子の似顔絵を手早くそっくりに描いて、室岡を喜ばせてくれた。

石原裕次郎ファンの先生は、映画にもよく連れて行ってくれた。

「今日は室岡くんが私の裕次郎なのよ」

茶目つ気たっぷりに、彼の肩を抱いたり、手をつないだりした。

しかし狭い田舎町ではこういうざっくばらんな振る舞いは、すぐ尾鰭をつけて噂の種となった。

「橋本先生は、室岡を鼻屑している」と、クラスメイトが陰で噂するようになり「おれも貧乏になりてえよ。先生と映画に行ったり、アパートでいいことできるからな」と少しませた男の子が、いやらしい眼で室岡を睨んで囁し立てた。

最初は毅然と変わりなく振る舞っていた先生も、PTAが問題視して騒ぎ立て、校長から強く叱責されたという噂が流れた頃には、目に見えて覇気がなくなり、食事も映画も六年生の初夏の頃には立ち消えとなってしまっていた。

働き尽くめだった母は六年生の十二月に、心筋梗塞であっけなく死んだ。親族間で揉めたあげく、室岡は横浜で細々と飲食店を営む母方の伯父の家に引き取られることになった。

日曜日のクリスマススイブ、閑散とした職員室で先生から転校手続きの書類が入った封筒を取り、一緒に部屋を出た。

どんよりと曇った灰色の空から、雪が舞い降りていた。

先生は真つ直ぐ校門に向かわず、園芸部が作っている花壇の方に向かった。冬枯れのなか、枝葉も淋しい草花のなかで、枝先に先生の口紅と同じ紅の色をつけた花がひとつだけ咲いていた。

「あの花、なんていうか知ってる？」

「冬の薔薇って書いて、……確か、ふゆそうびと」

先生は満足そうに笑って、小さくうなづいた。

「五月の薔薇のように綺麗に咲き誇ったり、この薔薇のように厳しさに耐えてひっそりと咲いたり、人の一生も、それぞれの場面で、精一杯花を咲かそうとする生き方なんだと思うわ」

先生は少年の肩を抱くようにして諭した。

「泣いていいのよ」

先生の手ぬくもりが、張りつめていた少年の心を溶かすように全身に広がった。

「何もできなくて、ごめんね」

先生の声は、震えていた。先生の掌に力がこもり、ぐいっと少年を抱き寄せた。先生の胸の膨らみが頬にあたり、先生のからだの柔らかさと温もりに、少年の眼から涙が堰を切ったように流れた。

母の死からの、緊張と怒りと悲しみを封じ込めていた心が溶解し、一時この安らぎのなかにいたいと、少年の甘い恋心は高鳴った。

ゆるい坂道を登りきると、コンクリート三階建ての校舎が浮かび上がった。二ヶ月前祖父父母が授業参観する行事で、孫二人が通うこの小学校を訪れていた。校舎の間にある花壇は、見事なほどに整備されていた。その一角に薔薇が植えられていたのを思い出し、帰宅の途中、ふと吸い寄せられるように立ち寄ったのだった。

暗闇の中で、携帯の微かな光を薔薇の植え込みにゆっくりと這わせた。その光の先に、紅色の花をつけた冬薔薇が一輪浮かび上がった。

「先生」

彼は声を振り絞り、その花に一步近づいた。

ふっと誰かに抱き止められた感触があった。あの膨らみ、あの柔らかさ、あの温もり。

「泣いていいのよ」

あの声を、もう一度聞いた。

「何もできなくて、ごめんね」

あの声は、やはり震えていた。

室岡が浸っていたあの日の切ない初恋の余韻を、携帯の着信音が破った。

「あなた、今どこにいるんです？」

妻のキンキンと苛立った声が響いた。

「クリスマスプレゼントを受け取ったところだ」

「クリスマスプレゼント？」

「初恋の人と、五十年ぶりに出会ったんだよ」

妻は言葉に詰まって、ハアと間の抜けたため息を漏らした。

携帯を閉じ、コートのポケットに突っこんで、夜空を見上げた。雪は深々と本格的に降り始めている。

横浜に転校した後も、先生は折々に励ましの手紙を下さった。先生自身も一年後に教職を辞め、眼鏡のデザイン関係の仕事に就き、三十二歳の時に漆器の職人さんと結婚したという知らせを受けた。

仕事が忙しく、家庭もあり、先生との交流は次第に暑中見舞い、年賀状のやり取りぐらいになっていったが、その葉書に添えられた鯖江の自然や伝統工芸、生活の一部を切り取ったス

ケツチが、先生の健在ぶりを示しているようで嬉しかった。

三週間前、娘さんから先生の容体がよくないことを知らされ、急ぎ七十八歳になる先生を見舞った。その半月ほど前に軽い脳梗塞を発症し、左半身が麻痺状態になったがリハビリでかなり回復してきたという。ただ食事を全く摂らなくなると、付き添っていた娘さんが嘆いていた。

先生は室岡の手を取ると「ありがとう。こんなに立派になってくれて、先生嬉しいよ」と、何度も涙をこぼしながら繰り返した。

十二歳だったあの日、駅まで送ってくれた先生は、手作りの弁当とポットに入った温かいお茶を渡し「もう、室岡くんに試食してもらえないわね」と淋しそうに笑った。

♪上を向いて歩こう

涙がこぼれないように♪

坂道を下りながら、室岡はつぶやくように歌った。先生の好きだった歌を、アパートのレコードで覚えた歌を、映画の帰り先生と一緒に歌った歌を。

雪が頬にあたり、涙と一緒に溶けた。

横浜に向かう列車のなかで、先生の弁当を食べながら、ぼろぼろと泣いて以来、どんなに辛くても、苦しくても、悲しくても泣いたことはなかった。

五十年ぶりに泣くんですよと、天国行きの列車に乗った先生に手を振った。あの日先生が眼鏡

を曇らせながら、両手を激しく振ったそのままに、感謝を込めて激しく振った。

雨上がりの京都は、独特の匂いで満ちていた。ちょっと湿っぽくて、変に温かくて、どこか懐かしいような、何とも言えないあの匂い。

暫し立ち止まって空気を吸い込んでいると、背後から声が飛んできた。

「止まっとらんと、はよ行きよし。お師匠さん待たせたらあきまへんえ、あんたさんはただでさえ三味が苦手なのやから」

置屋の入り口に立った先輩舞妓の芳乃が、急かすようにこちらを見ている。芳乃は慌てて「ほな、行つてきやす」と、三味線を包んだ風呂敷を抱え直し、歩き出した。

——ここは京都市、東山。五花街の一つ、祇園甲部。

志乃は、舞妓になるべく修行をしている、十六歳の少女であった。

一頻り志乃に三味線を弾かせた後、その初老の女性師範は溜息を吐いた。

「相変わらず 艶があらへんおすなあ。楽譜通りに弾いてはおるものの、どうも機械的や。もつとしつとり弾かれへんもんか……」

「至りませんで……」

「まあ今日はもうよろし。お帰んなさい」

「分かりました。ご指導ありがとうございます」

志乃は深々と礼をしてから 稽古場を出た。

いつもこうなのだ。志乃の三味線には艶がないと言われる。

どうしたものかと、暗い気持ちのまま置屋に辿り着いた志乃は、がらりと入り口の引き戸を開けた。と、「志乃、早う来よし！」という芳乃の声が飛んでくる。

「何ですか、姉さん」

声が聞こえてきた広間の方に足を向けると、芳乃が何やら布地を広げていた。

「もうすぐ夏やから、新しい着物の生地を見立てておるんや。その鯖江の業者さんが持ってきてくれたんだすえ」

芳乃に言われ、志乃はその男の存在に気付いた。

二十歳ぐらいだろうか。慎重な手付きで、木箱から布地を出して並べている。

芳乃が、ぽんと志乃の肩を叩いた。

「うちはそろそろ挨拶まわりに向かいおすえ。後はよろしゅう」言い置いて、急ぎ足で広間を出て行く。

男と二人で取り残された志乃は、彼に挨拶しようと口を開きかけた。が、男が咳く方が先だった。

「外、良い匂いですね」

思いもよらぬ言葉に、志乃はぽかんと口を開け、だが一拍遅れてああと手を打つ。

「雨上がりの香りのことですか。うちも好きですよ。」

男は頷いて、「昼寝したくなるような香りです」と付け足した。

なかなか面白いことを言う人だと思つた。

それが、志乃と彼の出逢いだった。

男は 木崎と名乗つた。福井県鯖江市の織物工房で働いているらしい。大学には行つておらず、今年で十八だと言つていた。

他の置屋にも布を卸しに行くので、一週間ほど京都に滞在することだった。

べべん、べべんと三味線の音が響く。

小さな神社の階段に腰掛けて三味線を弾いていた志乃は、だが、ふと手を止めた。

「 “ 艶がない ” 」

師範に言われた言葉を呟く。どうしたら、艶のある音色が出せるのだろうか。そもそも艶とは何なのか。

考えている内に分からなくなってきて、志乃は三味線を風呂敷に包んで立ち上がる。そろそろ置屋に帰ろう。

けれども庇の下から出た瞬間、ぼつりと雫が降ってきた。「雨……」生憎傘は持っていないので、三味線や着物が濡れてしまう。

狼狽している内に、本降りになってしまった。どうしたものか。

途方に暮れていると、ぱしやりと水溜まりを踏む音がした。志乃は顔を上げる。そして、目を瞠った。

ビニール傘をさしてこちらへやって来るのは、「……木崎はん」

志乃の前までやって来た木崎は、ちょっとだけ微笑んだ。「偶々通りかかったら難儀しているのが見えたので。こんなところで、何を？」

志乃は苦笑した。「ちいと、三味の練習を。うち 三味線が不得手なんですわ。どうやっても、ようならへんくて……」

向いていないのかも知れない。どんなに練習しても巧くならないのだから。

木崎は、志乃の言葉を黙って聞いていたが、ややあつて

「羽二重、という織物があります」と言った。

突然何をと訝しがる志乃に構わず、彼は滔々と続ける。「羽二重は、経糸と緯糸の内、緯糸を水に濡らして織るんですよ。とても手間が掛かります。

けれどもその手間のお陰で、羽二重は丈夫になり、滑らかな光沢が出るんです。

それは、布地が完成しないと分からない。長い作業に嫌気がさして放り出してしまつては、全てが台無しになるんです。織り続けた者だけが、羽二重の美しさを見ることが出来る」

木崎の静かな声は、不思議と志乃の胸に染み渡つていった。『長い作業に嫌気がさして放り出してしまつては全て台無し。織り続けた者だけが美しさを目にする』

「うちも、根気強く練習し続けたら、いつか満足に弾けるやろか」

呟いた志乃に、木崎は「きつと」と微笑み、置屋まで送りますよと傘を傾けた。

その木崎の柔らかい表情に、何故か志乃の胸はどきりと鳴った。

数日後、木崎は鯖江に帰つたと、置屋の女将から聞いた。

木崎の工房の布地を気に入つたらしい女将は、「それにしてもあの業者はん、良いもの持つて来はつたねえ。柄が上品で、色も鮮やかで……」と、しきりに呟いている。その横で唇に紅を塗りながら、志乃はそつと目を伏せた。

木崎が帰つたと聞いて、何故こんなにも寂しいのか。志乃にはまだ分からなかった。

「恋でもしといやすかね。何やら音色が変わつてきはつた」

三味線の師範の言葉に、志乃は目を瞠った。そんな志乃に気付かず、師範は満足げに続ける。「艶のある弾き方になってきといやす。よろし、今日はここまで」

「あ、はい……」

志乃はぼかんとしたまま頷いた。

恋。師範はさつきそう言った。私が？ 恋？

誰に。

自身に問いかけていると、ふと 木崎の顔が脳裏に浮かんだ。その瞬間、心臓が跳ねる。

「嘘……」

志乃は茫然とした。木崎に恋したというのか。笑顔が優しい、あの人に。

でも、恋したところで何になると言うのだろうか。彼は、もう鯖江に帰ってしまった。京都と鯖江は遠く離れている。二度と会えないだろう。

「馬鹿どすなあ。うち」

やっと気付くなんて。顔を覆った志乃の耳に、どこからか蝉の鳴き声が聞こえてきた。

京都の夏は暑い。重たい着物を身に纏う舞妓にはきつかった。

置屋の二階の窓辺で、志乃は芳乃に貰った団扇で暑気を払い、溜息を吐く。「こんなに暑いんじや溶けてまう……」

窓の向こうには 祇園の町並みが広がっている。どこかに木崎が偶然歩いてはいないかと目で探してしまった自分に気付き、志乃は自嘲した。

「何やっとなるんやろ」

じりじりと夏が過ぎ、秋になった。通りの紅葉も色付き始めている。福井ではまだだろうかと志乃が詮無いことを考えていると、置屋の玄関口から「ごめんください」と訪いの声が聞こえた。

「ちいとお待ちを」

志乃は、慌てて引き戸を開ける。そして、目を瞠った。

「え、木崎はん……?」

夏の始めに北陸へ帰った筈の木崎が、何故かそこにいる。見間違いだらうか。

木崎の方も、あれ、という顔をして

「お久しぶりです。前に来たときにこの女将さんに気に入られて、季節の変わり目毎に布をお届けすることになって」と告げた。どうやら見間違いではないらしい。

「そうなんどすか……」

志乃は、ゆるゆると頷いた。木崎の言葉を理解するにつれて、嬉しさが込み上げてくる。

「ほな、女将はん呼んで来おすから、お上がりやす」

「あ、はい」

女将を探しに奥へ引っ込む志乃の口元には、自然と笑みが浮かんでいた。
——言ってみようか。夏には言えなかったことを。あなたが好きだ、と。

女の身で志士だ攘夷だと騒ぐ手合いは、そういう男の色に染まった成れの果てなのだ。

小四郎はそう思っている。だから路傍に蹲る澄をみたときも格別の思いは抱かなかつた。

うだるような夏の夜、下堀川の薄暗がりでは彼の主人を待ち伏せた不逞浪士はわずか四人。しかも小四郎の腕にかなわぬと見るや算を乱して遁走している。二三切り結んだ折に肉を斬った感触があつたので目をやると、影が一つ崩折れるところだった。面体を改めれば苦しげに息をするのはまだ娘。肩口を浅く裂かれて半着に血がにじんでいる。

振り返るといくつかの三つ引提灯が近づいてくる。小者たちに守られた間部侍従は跪いた小四郎に「大儀だの、怪我はないか」と気さくに声をかけた。

まったく。涼しい顔をしておられるものだ。

わずかばかりの供回りで二の丸と宿所を行き来する主の豪胆さを若い小四郎は敬愛してやまない。だが末席とはいえ大公儀の老中が洛中で襲われる時節だ。主の流儀はもう通用しないように思われた。そもそも小四郎は警護の侍ではない。理財に明るく周旋の才もあることから引き立てられた算用方にすぎないのだ。劍の腕がたつのはいわば余祿であつたが、この夜その余祿が思わぬ功名となつた。

「青鬼が」震える声で賊が叫ぶ。

「ほう、女か」意外げに覗きこんだ間部侍従の顔色は、しかしたちまちま変わった。

しばらく考えこんでいた侍従は、やがて他の侍たちを遠ざけて小四郎を呼ぶ。

「この娘を奉行の詮議に回してはならぬ。竹屋町でしばらく取り籠めておけ。よいか、藩の者にも気取られてはならぬぞ」いつになく険しい主の顔を見て小四郎はとくに異論を挟まず首肯した。

竹屋町の奥には主が他藩の重役と密議をこらすために購った町家がある。小四郎は一行が去ったあと町駕籠を呼んで娘を押し込むと一散にそこへ向かった。鯖江藩の提灯を掲げれば町方も見咎めることはない。過分な酒手を渡すまでもなく駕籠かきたちも恐れ入っていた。井伊の赤鬼に並び称され京童までがその名を恐れる青鬼間部の家士の命だ。余計な口外などしやうはずもなかった。

小四郎はそこで待った。妾を囲う粹な町家なら下女の一人もいるものだが、そこには小四郎と女の二人ばかり。しかもその夜から女は高熱を発した。肩口の傷は深手ではないが膿む恐れがある。医師の心得のない小四郎には傷口を洗うことぐらいしかできなかった。襟を寛がせた時には気丈にも小四郎を睨みあげた女だったが、傷口へ焼酎を流すと苦痛のあまり叫びをあげた。よほど疲れたのか白布を巻いて布団に寝かせるとたちまち寝息が聞こえた。

日中には様々な物売りが往来するので出歩かずとも諸々用は足りた。独り者の小四郎は魚も

捌けば煮炊きもこなす。他に為すこともない彼は一人で女の世話を焼く羽目になった。

三日目には女の熱が下がり粥や菜漬を口にするようになった。逃げ出すやもしれぬと気を張っていた小四郎だが、女にはその気力もないようだった。

炎熱のような夏日はいつ果てるともなくつづいた。襖を開け放つて縁側でうなだれていた小四郎は、通りかかった物売りから無用のものを買ひ求める。

その透き通るようなびいどろ風鈴を吊るすと、庭には涼やかな音色が響いた。

ほどなくして、小四郎は畳の間からためらいのまじった女の声を聞く。

「澄です」それが女の名前だった。

藩邸の上役が忍びで町家を訪れたのは夏も終りの頃である。

この頃主人たる間部詮勝は禁裏を相手に縦横無尽の働きを続けている。所司代の幕吏はもとより国許鯖江からも藩士たちが大挙入京して一橋派や攘夷志士たちを取り締まっていた。侍従のもとで奔走することを夢見てきた小四郎からすればこの大事に逼塞せざるをえない己が身の上は恨めしい。だがこの日もたらされた下命はさらに屈辱的なものだった。

「国許へ戻れと、申されますか」

澄は小四郎と同郷の鯖江の出であるという。藩のさる重役の息女であったものが勤皇の熱に浮かされ国抜けしたのが二年前。体面を慮った家からは流行り病で卒したと届けが出されてい

るとのことだった。

「殿はな、あの娘が童女であつた頃をよくご存知であられたそうな」

勅許を巡る駆け引きの最中、矢面に立つ老中の母藩から咎人は出せない。連れ戻つて尼寺へでも隠してしまえというのが間部侍従の命であつた。

「惜しいことだ。おぬしの一刀が」とその上役は手刀を作つて斜めに空を切つて見せる。

「いますこし深ければこのような面倒にはならんだわ」そういうと大仰に笑つた。

小四郎は澄を連れ京をあとにした。叡山の峰々を望む湖西の路を下るにつれ、北陸諸藩の人数が続々京へのぼつてゆくのが見かけた。小四郎はついに時勢から取り残されたことを思い知つた。北国街道に入るころには鯖江藩士とも行きあうようになり、二人は目立たぬよう夫婦の体を装つて旅を重ねた。

出立以来、小四郎は上役の言葉を思い返していた。藩にとって澄は厄介者だ。侍従の温情はもつたない限りだが、君命を横にしても計るべきは藩の安泰であるにちがいない。

人知れず斬れということか、と小四郎は考える。

山中をゆきながら、澄の二歩後ろに身を寄せて刀の鯉口を切つてみる。刹那、上役の手刀を振り下ろす仕草と訳知り顔の下卑た笑みが思い出された。

「斬れるかよ」口の中でそう呟いた。

夕暮れ近く、息を切らせて峠を越えたとき、北方に遙々と広がる鯖江の町が見えた。遠く長

泉寺山の上には材木や大岩が積み置かれているが、城普請はもう何年も止まったままだ。それを見たとき小四郎の胸に希望が湧いた。

藩にとつて鯖江築城は長年の悲願だ。公儀より認可は下つて久しいが、世の騷擾と度重なる飢饉から間部侍従は作事を差し止めた。

「だが、まもなく世は鎮まり普請も動き出す。その時こそ俺は才知を存分に振るつて働くのだ」

莫大な物要りを伴う城造りにあつて、颯爽たる吏僚として藩財政を切り回す己の姿を小四郎は夢想した。京では運に見放されたこの俺だったが、力の活かすべき場所は眼下に広がるこの鯖江にあるのだと。

そのとき、ふいに嗚咽が聞こえた。

目をやれば澄がうつむいたままむせび泣いている。驚く小四郎にもかまわず澄は子供のよう
に大泣きに泣いた。

惚れた男を追つて血なまぐさい攘夷志士に同心した世間知らずの娘。あろうことか己が郷里から立身した幕閣を害さんとした女。手負いの自分を置き捨てた男の名も割らぬ気丈な女。その女が、無残にも連れ戻された郷里を前にして生の感情を露わにしていた。

志はいまも尊いかもしれぬ。だがその心と魂はわずか二年でどれだけ荒んだのだろう。

「澄」

我知らず小四郎は女の手をとっていた。

ずっと頑なだった女は、腕ばかりか震えるその体までも軽々と預けてきた。引き寄せた肩ごしに、街道を下った小さな宿場の灯が見えた。

世は、鎮まらなかつた。

静謐どころか麻のごとく乱れるのはそれからだった。年が明けると江戸の柳営に呼び戻された間部侍従は老中職を解かれた。大老井伊掃部頭との軋轢がその因であるという。二年後にはその井伊掃部が桜田門外にて浪士に討ち取られる。幕末と呼ばれる騒乱期はこれをもってようやくはじまった。小四郎がいた頃の京など後になって顧みれば端緒にもならぬそよ風のごとき時代にすぎなかつた。

復権した一橋慶喜は大獄に加担した幕閣をことごとく処分し、間部侍従も謹慎塾居、鯖江藩は減封をうけ四万石となる。これにより鯖江築城の夢は永遠に絶たれた。

藩内にも佐幕勤皇が入り乱れいくつかの血なまぐさい騒ぎが起こった。先の藩主の側近と見られた小四郎はある夜請願寺脇を歩いているところを袈裟掛けに斬られた。下手人は分からずじまいだったが、藩政を動かすまでになった勤皇派の指喉であることは明らかだった。後難を恐れた親類たちは瀕死の小四郎を隠した。運び込まれた先は一族ゆかりの老夫婦が田畑の守りをする沢村の農家だったが、そこに下女として匿われていたのが澄だった。

甲斐甲斐しい澄の手当てで小四郎は一命を取りとめたが、大方の望みを失った彼の五体は打ちひしがれた心と相まって容易には癒えなかった。

看病されるうち時代は転回し、小四郎は病床で御一新の日を迎えた。

「太政官には、お前の知る者もいるのではないか」

その夏の日、ようやく体を起こせるようになった小四郎は庭先にいる澄に声をかけた。

「立身した大官のなかには、お前を探している男がいるやもしれぬぞ」

澄は菜干しをする手を止めたが、何もいわなかった。

「お前の夢見た世が来たのだ。もう俺のような者には構わず……」うつむいたままそう口にした小四郎が顔を上げたとき、澄の姿はもう庭先から消えていた。

ほどなく気配が戻ってきて、障子越しに澄の影が背を伸ばすのが見えた。

チリン。

やがて響いたのは、いつか聞いたびいどろ風鈴の涼しげな音だった。

今年も、イルミネーションは美しかった。
毎年この季節になると、かすかに胸の奥が痛くなる。

多くの家族が願いを込めて作り上げる、それぞれのクリスマスツリー。
光の中で、短冊たちが夢や願いを語っている。

「ここに来るのは何回目だろう」

美津子は記憶を辿ってみる。

数えきれないと思い直し、ため息とともに笑った。

ここ西山公園は、四季を通して色々な表情を見せてくれる場所だ。何より市民から愛されている。
この街で生まれ育った美津子には、記憶と共にそこにあり、当たり前前の景色だった。

父は既に他界してしまったが、美津子は父が大好きだった。

春は桜を、桜が散った後には公園いっぱい広がるツツジを、秋には紅葉を見に連れて行ってくれた。寡黙だが、いつも子供の幸せを願っている人だった。

父と同じくらい、その場所が好きだった。

大人になり結婚し、子供たちとの思い出の方が多くなっていた。

美津子もまた、父と同じように子供の幸せを一番に願うようになっていた。

五年前の初冬。結婚して十年が経っていた。

「私は何をしているんだらう」

「何の為にここにいるんだらう」

美津子は、言いようのない虚しさで自問自答を繰り返していた。

きっと何もない日常が、大切に幸せなのだと分かっている。分かれようとしていた。

少しずつ、夫との会話が少なくなっていた。

話しかけると嫌な思いをするのが分かっていたからだ。話さないでおこうと勝手に決めた。

夫も仕事のストレスを抱え、出たくもない大きな声を出すようになっていた。

美津子はその日、仕事帰りに寄り道をしようと西山公園駐車場に車を入れた。

そんな気持ちになったのは、ライトアップされた木々が目に入ったからかもしれない。誘われるようにウインカーを出していた。

冬の空は既に暗く、寒かった。

噴水のある広場では、幻想的な光達が優しく夜を照らしていた。

毎年五十組程の家族が、電飾や短冊で工夫を凝らし、それぞれの祈りを込めて作り上げる。このイルミネーションは、市民だけではなく、遠方からも訪れる冬の風物詩となっている。

美津子は車から降り、光を降らせる噴水の前に立った。

心地よい水音の中でゆっくりと深呼吸してみた。何も変わらなかった。心の澱は消えなかった。

「帰って晚ご飯作ろう」と独り言を言った美津子に、「大変ですね」と男性の声が返ってきた。

その人は、ちよつと困った様な笑顔を向けてきた。やはり夜の独り言は恥かしい。

「綺麗ですよ。幻想的だ。癒されます」と、その人は優しく、噛みしめるように言った。

「綺麗ですね」

美津子は自然と返事をしていった。

「心が疲れた時ここに来ると、不思議と元気が出るんです。光が体の中を洗ってくれているよ
うな」

その人は、光たちを見つめながら言った。詩的な表現をする人だ。

もう少し話してみたかった。

「では、失礼します。ごゆっくり」

美津子は気持ちに反して挨拶し、踵を返した。

「お気をつけて」と肩越しに声が聞こえた。

家に帰るまでの短いドライブは、昨日より少し幸せだった。

土日を迎え、美津子は家事と子供たちの世話、義母の病院と忙しく動き回った。

洗濯機を回しながら、公園で会った人を思い出していた。心に沁み込んできた声を思い出していた。

上のお兄ちゃんは小学校二年生、下の妹は年中組。まだまだ手がかかる。

気が付けば、子供たちとの会話は多いが、夫とは殆ど会話をしていなかった。家の中の業務連絡。報連相の報と連だけ。これからも、この日常は続いていくのだろうか。

家事をせわしなく済ませ、娘を保育園に連れていきその足で職場に向かう。

また一週間を乗り切らなければ、と気を引き締める。「しなければ」とばかり思っていることに溜息が出た。

美津子は子供の頃からそうだった。何をするにも、楽しさよりも義務感が勝っていた。

「その場のノリよ、ノリ！」とひよいひよいと楽しめる友達をたしなめながら、羨ましくもあった。

ひよいひよいと楽しめたらどんなに楽だろうと思ったが、出来なかった。性格だ。無理をする
と苦しくなる。

それでも結婚前は、それなりに屈託なく人生を楽しんでいたと思う。友達と遊びにも行ったし、一人の時間も充実していたと思う。

結婚をし、子供たちを宝物だと思える日々は幸せだったが、いつからだろう。「私は何をして
いるんだろう」と思うようになったのは。

夕方、美津子のパート先と自宅の中間にあたる西山公園を右手に見ながら迷っていた。

「今日も寄り道、しようか。やめようか」

時計を確認し、車を公園の駐車場に入れた。

「光で体の中を洗おう」と自分に言い訳した。

その人は、今日もそこに居た。

「お仕事帰りですか？」

美津子の方から声を掛けた。

「途中休憩です」

あなたも来ましたか、というような柔らかな笑顔で言った。短い会話だった。

職場が近くにあること。子供の学校の事があるから、と単身でこの地に来ていること。

「寂しくなることもありますか」と光を見つめて言った。

仕事帰りの数分を、公園で過ごすようになって二週間が経っていた。

「家族が近くにいっても寂しくなることがあるんです」

美津子は言った。初めてのカミングアウトだ。自分の世界と交わることのない人だから言えたのかもしれない。

「あなたは幸せですか？何のために一人で此処にいるんだろうと思ったことはありませんか？」美津子は心の中で訊いた。

「言葉にしないと伝わらないことがあると思います。貴方が寂しいと感じているのなら、ご主人も同じ様に感じているかもしれません」

夫との距離感だと分かっているかのように、その人は言った。

クリスマスを翌週に控えた頃。

「美津子、来年は子供たちと一緒にクリスマスイルミネーションに参加してみようか」と夫が言った。

長い間「ママ」と呼ばれていた美津子はびっくりして振り返った。

瞬きも忘れ、ほんの何秒か夫の顔を見ていた。

返事を待つ真っ直ぐな視線だった。

「うん、参加しよう」笑顔で返事をしていった。

子供たちも交え、家族の夢を膨らませた。
やはり、寂しかったのは私だけではなかったのかもしれない。

翌日の夕方。公園は、雪が降りだしそうな寒さだった。

「こんばんは」美津子は声を掛けた。

その人は、いつもと同じ柔らかな佇まいでそこに居た。

「ここに来るのは今日で最後になります。今度は家族と来たいと思います。」

「それがいい」と言った瞳の奥に、悲しい色が見えたのは気のせいかもしれない。
雪になりそうですね。と他愛もない話をした。

「素敵なクリスマスを」

その人は右手を出した。

「よいクリスマスを」と美津子も右手を出した。とても温かい手だった。

車に戻ると涙が頬をつたって落ちた。何故だろう。何故だか分からないが、泣いていた。

今年も公園のイルミネーションは奇麗だ。

でも四年前に家族で作ったツリーが、美津子にとっては一番だ。

あれから、毎年家族で来るようになった。

「ママー、見て！きれいだよ！」と呼ばれ振り返る。
色とりどりの光の中で、子供たちと夫が美津子を見ていた。笑顔だった。

—あの時の人も、幸せでありますように—
心の中で祈った。

私の教室は二階の渡り廊下の手前という理由だけで学校中で唯一、テラスが付いていた。晴れた日の休み時間になると、安っぽい人工芝が敷き詰められたテラスに誰よりも一番に出てくるのが和之だった。

私は他の男子生徒とふざけ合う彼を誰にも気付かれないようチラリと見ると不思議と体温が上がり、心臓の鼓動が喉元まで伝わった。体の中に小さい太陽が生まれたようだった。

夏休みが明けると体育の授業は全てマラソン大会に向けた練習となり、学校横の王山古墳群をランニングした。私はマラソンが大嫌いだだったが練習は、さぼらなかつた。その小さい丘陵を走ると体は軽く木々に撫でられる感じがした。風に揺れ葉と葉の会話が聞こえてくるようだった。

晴天の日には鯖江の街並みも一望でき、良い事があると決まって王山古墳を散歩し帰路についた。

ある日、学校が終わりいつものように王山古墳を散歩していた。赤い塗装が剥げて

紅赤色と年月が刻まれた鉛色のコンクリートの上に落ちたヒサカキ葉の階段をあがると和之がいた。

私にとって特別な場所に特別な人がいる偶然に言葉を失い身じろぎもできずにいると

「お前、どうしてここにいるの？」

と和之は目を丸くして聞いてきた。

「そっちこそ、どうしてここにいるの？」

「俺は——野鳥を見にきたんだ」

和之の頬が薄紅色に染まった。あのテラスではしやぐ彼とは別人だ。

「今は木が生い茂っているからなかなか見えないけど……」

「けど？」

「鳥の声で何がいるか分かるんだよ」

そう言うのと和之は顔をプイと背けたが耳まで紅色に染まっていた。

「これはメジロの鳴き声。メジロは番いになって木々や花を飛び交う時に鳴くんだけ」

「すごい。本当にわかるんだ」

「こっちにいるって知らせてるんだ」

それ以来、私は学校が終わると鳥の声を聴きに王山に足を運んだ。私がいると後から和之が来た。しかし、和之が先にいることの方が多かった。

和之は独特の世界観があった。いつも聞いている鳥のさえずりや風の音に心をゆだねると、それらはあたかも自分の為に演奏されているハ長調のようなだと語った。彼は、ふわりと落ちていいる鳥の羽を拾いそつと鼻にあて匂いを嗅いだ。

「これはヒヨドリの羽だな」

得意満面の笑みで羽を優しくなでた。

「えっ、匂いでわかるの？」

「あはは、冗談だよ。匂いでは何の鳥かはわからないよ」

「ちよつと、信じたじゃないの」

と鳥の羽を思い切り投げた。しかし、投げた羽は勢いを殺し、ふわりふわりと優しく和之の肩に落ちた。

「これは換羽(かんう)といって生え変わりで抜けた羽じゃないね」

「じゃあ、何の羽なの？」

「猛禽(もうきん)類(るい)といってトビやフクロウなんか他の鳥を狙った時に落ちた羽だね」

と膝を折り落ちてゐる羽を一つずつ集めた。小さい綿毛のような羽から長く鋭い羽まで数種類の羽が散乱していた。

「鳥が鳥を捕まえるの？」

「そう」

「世の中、思い通りには行かないよ。ヒカサキの花や葉もいずれ落ちる。ほら、足で踏んでいるじゃないか」と憂いながら答えた。もはや私の知っているテラスの住人では無かった。

私は和之から沢山の事を学んだ。元々、人に教えることが好きな和之は高校を卒業し、地元の大学に進学し教員となった。私もまた進学し看護師となり自然の成り行きで和之と結婚した。

歳月を追いかけ、私達は歳を取ったが笑顔や仕草は高校時代から何もかわらなかった。顔の小皺がやんわり出始めた頃だった。恵まれた人生をこれからも送り、そう遠くない未来の話をしながら幸せを感じていた矢先の話だった。

和之は自前の明るさで周囲には気付かれずにいたが体調が優れずにいた。寒い冬、外に長時間いたからだ、風邪だと自分に都合の良い理由を言い聞かせていた。

いよいよ不調は気のせいでは済まされず、病院に重い足を運んだ。和之は検査の最

中、私に

「想像している最悪の事態の九割が現実にはならないって。だから大丈夫だよ」と慰めた。こういう時でも相手を思いやる事を言えるのが人間という生き物だ。和之らしい。

検査の結果は検査時間の何倍もかかった。診察室に通され映し出されているレントゲン写真に私は目の前が真っ暗になった。

和之の胸の写真は真っ白で看護師の私には悪いことが分かった。しかし、それを表情に出すまいと平静を装い口角をやや上の方に固定した。

想像している最悪の事態には九割がならないはず。しかし和之は残りの一割に当てはまってしまった。こんな時でも医者という生き物は無表情で言葉を重ねる。しかし、頭に入ってこない。ああ、これが放心状態なんだ——と私は変な納得をしていた。

結局、医者の説明を受け覚えていた言葉は少なく、それは『進行性の悪性胃癌』だけだった。時間が経つにつれ、じわじわと悲しみがこみ上げてくる。和之はまだ、人生半ばの折り返しすら過ぎていない。この世の中に信じたくない事はある。幾らでもある。

暗く先の見えない二重の螺旋階段を手放しで降りる様だった。

ところが和之は、さほど気にした様子もなく

「あと何年くらい生きられるのかな。まあ、これがお前じゃなくてよかった」

と診察室を出て咳いた。一番辛いはずなのに取り乱す事も無かった。私はただ、この理不尽に牙をむきたかった。

私は看護師なのに気が付かなかった。彼は人の事を一切悪く言わない、怒ったりもしない。どうして、こんなにいい人を病気にするの？と何度も自問自答を繰り返したが答えは見つからなかった。

抗癌剤の治療は診断されたその週に始まった。一日でも早くという医師の配慮からだったが、私はその配慮の裏に和之はそれだけ危機的状況なのだと言葉が通じた。抗癌剤の治療は最初から百パーセントで行くと言われた。それほど強い薬という意味なのだろう。

しかしその治療を和之は辛いとは言わなかった。逆に私が辛く見ていられなかった。何をしても泣いてしまいそうで鼻の奥にある熱いものを懸命にこらえた。

たったの数か月で和之の体調はますます悪くなった。食べる量が少しから数口になり筋肉は削げ落ち肋骨の形が浮き彫りになった。

「一日ってこんなに短かったんだ」

と小さく肩を震わせながら和之は話した。私は震えている肩に気が付かないフリをしながら背中越しに答えた。

「ほんとだよ。あつという間」

「俺さ、行きたいところがある」

和之は癌と診断されてからは自分のやりたい事やしたい事は一切言ってこなかった。逆に思いを吐き出してほしいと思う事もあったが私を思つての優しさだろう。

「俺、抗癌剤の治療が終わったら玉山に行きたい」

これを聞いた時、私は絶対に連れて行こう、背負ってでも行こうと決心した。そんな決心とは裏腹に

「わかったよ。でも体調と相談。春になってからだよ」と小さく返事をした。

春になり桜も五分咲きの日、私は和之と共に懐かしの場所を訪れた。高校時代より若干、年月が刻まれた鉛色の階段は和之には堪えるのか言葉を発しなかった。二人でゆっくり時間をかけて最初に見えてくるベンチまで歩く。

春夏秋冬とは当たり前のように巡る。無邪気に過ごしたあの頃と違って新緑や鳥の

声がこんなにも愛おしいと思ったことは無かった。

和之は満面の笑みで

「ああ、最高」

と呟いた。その顔は高校時代とかわらないテラスの住人に戻っていた。この時間が永遠に続けばいいのにと思うと同時に私は我慢しきれず声を殺しながら大粒の涙をこぼした。

「王山ってね、弥生時代には逢う山で（おうざん）って呼び方だったんだよ」

「うん……」

返事をするのがやっとだった。

「逢う山だったんだよって高校の時は恥ずかしくて言えなかったけど」

「けど……？」

和之は何も返事をしなかった。私もそれ以上は何も聞かなかったがお互い充実感でいっぱいだった。

和之は無言で立ち上がり更に奥に見えるベンチまで歩いた。私も洋服の袖で乱暴に涙をぬぐいその背中を追った。

毎年、見慣れているはずの桜の花がこんなに美しい色をしていた事に初めて気づき

泣きながら笑った。そんな私を見て和之も泣きながら笑った。

翌年、私は小さい手を引いてこの場所を訪れた。

「野鳥の鳴き声はきれいだと思うかもしれないけど命がけの鳴き声なんだぞ」と、その小さい手の先にふわりと語りかけた。

黄色い柚子のへたを取り、皮を播り下ろす。

赤唐辛子はへたと種を丁寧に取り、細かく刻んだ後、播り鉢に移してごりごりと播り潰す。そこへ播った柚子を加え、さらに播る。柚子の黄と唐辛子の赤が混ざり合い、次第に綺麗なオレンジ色になる。

ひたすら播る。腕が上がらなくなり、ようやくペースト状になったところで、塩と粉末の鷹の爪をぱらぱらと。ねっとり混ぜて完成。

刺身の脇に添えて出すと、「へえ、ほんとにウニみたいだな」と将平が物珍しそうにごくりと喉を鳴らす。箸でそれをちよんと刺身にのせ、醤油に軽くぐらせて口へ放り込む。

「うわ、柚子のにおいがたまらん。しかもこのピリ辛感。やべ、クセになりそ」

夢中で食べ始めた恋人を、美晴は平たい微笑みを浮かべて見守った。

「八年一緒に住んでるけど、知らないことってまだあるもんなんだな。これが例の亡くなったおばあさんの味？」

「うん、子供の頃しょっちゅう家に遊びに行って手伝ってた」

山うに、と呼ばれる福井は河和田地方の薬味である。

矢野のおばあちゃんとは幼馴染の祖母で、美晴にとっても家族のような存在だ。昨日、葬式に参列してきた。帰りに矢野家から大量に柚子をもらい、ふと思いついたのだ。

「ほんとうまい。これ名物なの？」

「さあ、東京じゃ見たことないかも。いつも手作りを普通に食べてたから買うっていう意識もないし、所詮薬味だから絶対ないと困るわけでもないし」

同棲して八年。今年でお互い三十になる。美晴は自分も箸の先で山うにを舐めてみる。鷹の爪はもう少し入れた方が好みだが、将平はこのくらいが好きだ。食べながらスマホを見始めた将平を見つめ、美晴は本題を切り出した。

「ねえ、私が福井に帰ろうと思ってるって言ったら、どうする？」

「また？ あ、正月か。俺はいつも通り四日か五日に顔出すかな。うちにはい

つ来る？」

また？が引っかかり箸がぴくりと止まった。が、スマホでカレンダーをチェックする将平は無論そんな美晴の反応には気付かない。

「そうじゃなくて、Uターン。福井に戻るの。引越してこと」
将平が徐にスマホから視線を剥がした。

「……なんで？」

「鯖江で眼鏡屋に小物をおろしている友達が、本格的に雑貨で路面店を出そうとしていて。私も一緒にやらないかって」

美晴は企業で働くジュエリーデザイナーだ。自分で製作はしないが、企画と発注、監修を務める。葬儀で帰省した際に旧友と飲み、話が盛り上がった。

「元々製作がやりたかったし、向こうは田舎ゆえに、東京で出来ないことが出来るそうなんだよね。キャリア転向って意味で踏み出してみようかなって」

それにもう三十だし、どうせ私ら結婚しなさそうだし、という本音はもちろん言わない。

「ふうん、美晴がそんなヤシン家とは知らなかったな」

からかうような口調で応じる将平の表情は硬かった。

その夜、ダブルベッドの片側から、将平のくぐもった声がした。

「なあ、地元帰るのつてもしかして俺にハッパかける意味もあつたりする？

将来、とか。これを機にどうこう考えてたりする？」

ハッパをかけてどうするのだ。この期に及んでもまだ「結婚」の二文字を口
にできず「将来」などと濁す将平に、思わず口の端が上がった。

「ハッパじゃなくて、見切り。色んな意味でいい機会だと思った、それだけ」
「俺、捨てられるんだ」

乾いた笑いが聞こえた。ああ、私、加害者か。美晴の頭がすう、と冷えた。

ずっと将平優先に生きてきた。元々尽くすことが苦ではないし、他人に合わせる方が楽だ。現状維持を好み、人並みの人生設計すら面倒くさがる将平に合わせ、何も言わずに今日までできたのは、他でもない美晴自身だ。

周囲が結婚し始め、各々キャリアを見直す中、強烈に置いてけぼりを感じていたこの三年余り。旧友の話は渡りに船だった。

正月は、ひとりで帰省した。

矢野家は実家から徒歩三分。今も矢野の両親と矢野が住んでいる。

矢野星汰。小中高の幼馴染。

互いの家を行き来し、当たり前のように毎日一緒に過ごした兄弟かつ親友。切っても切れない存在。周りから「付き合ってるんしょ」と言われ、否定する度にくすぐったい思いが混じり始めたのはいつからだっただろうか。

あの頃、「付き合う」という「判」がなくとも良かった。ない方が、良かった。「恋人」に踏み込まないことで保てる距離感に安心し、それでいて他人は入り込めない空気に酔っていた。だから厳密に言うとな星汰が「彼氏」だったことは、ない。

美晴は十代の自分を思い出し、苦笑する。あの頃と打って変わり、三十路を迎えた今は「結婚」という「判」を得られないことが気に入らない。宙ぶらりんの距離感はいつの間にか居心地が悪くてしようがなかった。

「美晴ちゃん、いらっしやい」

玄関で迎えた星汰の母が朗らかに微笑む。喪中なので新年の挨拶は控える。

「今、ハルミちゃんが来てるわよ」

廊下の先に行くおばさんが言った。

「ハルミちゃん？」

「あれ？ 聞いとらん？ 星汰の」

星汰の、で居間の引き戸を開ける。

「よー」

コタツを囲むのはジャージ姿の星汰と、その父。ちよつとふつくらした眼鏡
女子がこちらを見上げ、軽く頭を下げた。

「わざが悪いな」

星汰が言った。『ハルミちゃん』がおばさんが座れるようぎゅつと隅に詰め、
美晴には一人分の一辺が与えられる。

「あんた、ハルミちゃん紹介しとらんの」

「ハルミです。星ちゃんの、」

言つて、ハルミちゃんがしつとりと星汰を見やる。一体星汰の何々だ。

「結婚するんだあ、春に」

照れくさそうに星汰が頭を掻いた。

「喪中なんやけど、ばあちゃんも喜んでたし延期するのもねえ。それに、子供は待ってくれないで」

おばさんがハルミちゃんに笑いかけ、ハルミちゃんが嬉しそうにおなかに手を当てた。足元が崩れて一気に引きずり込まれる。その奥にあるものが、果たして怒りなのか哀しみなのか、——嫉妬なのか、知りたくもない。

葬式に、ハルミちゃんはいなかった。葬式で、星汰はだってそんなこと、ひと言も。

ひきつる頬を笑顔に見せかけ、美晴は突っ立ったままことさら明るい声で普段は封印している訛りを出した。

「ほやったんけえ。おめでとお。あ、これ、お供えに。後で皆でどうぞ」

「今」の自分は努めて標準語を話す。だからこれは「仮」の自分。演じることで粟立った胸の内を幾分誤魔化せる気がした。

「わあ、さすが東京。お洒落すぎる。おばちゃん、開けていい？ 皆で食べよ

さ」

お供えに、と熨斗までつけてあるのに何この子。田舎臭い天然な大らかさが鼻につく。

コタツには入らず、仏壇に線香だけ上げさせてもらおうと、美晴は早々に暇を申し出た。

「美晴」

玄関先で星汰が追いかけてきた。寒いのにサンダルを引っかけわざわざ表まで出てくる。

「舞子から聞いた。こっち戻ってくるんや」

舞子と一緒にお店をやるうと言ってくれている旧友だ。この辺りは狭い。話は筒抜けだ。

「まだ確定じゃないけど、一応夏を目処に」

「ほうか。東京で同棲してたんと違うんか。あ、もしかして美晴もその人連れて来てこっちで結婚するんか？」

つまりはこれが聞きたかったのだろうか。真意に期待している自分を殴りた

くなる。半ば開き直りでわざとらしく肩をすくめた。

「あー、別れることにした。三十路やし、色々仕切り直そうかと」

「ほうか」

空気が奇妙に沈みかけたところで、「なーしてんの」とハルミが開け放たれた引き戸の内側から声をかけた。天然だが抜かりがない。

美晴は標準語で「それじゃ」と奥に向かって頭を下げ、実家に向かう坂道を降り始めた。手にはもう一つ、小さな袋。中には山うが入っている。お供えとして矢野家に、星汰に食べてもらおうつもりで作ってきた。

星汰の好物。唐辛子の量が美晴の好みとぴたりと同じ。葬式で星汰に会わなかったら、多分Uターン転職の踏ん切りはつかなかった。

軽く茹でた牡蠣をオリーブオイル、酢とわずかなんにく、山うにで和える。舞子の自宅で披露したつまみを、家主はくう、と目を閉じ噛み締めて絶賛した。

「ねえ、夜だけお酒出すカフェもやらん？ 美晴の山うにおいしすぎ。流行る

かも」

舞子の賛辞に、手え広げすぎ、と美晴は笑った。つるりとした牡蠣の表面で光るオレンジ色を眺める。同じ鯖江市出身でも、舞子はほとんど食べたことがないらしい。

一心に租借する将平の顔が浮かんだ。教えなきやよかつたな、そう思いながら、コタツの上に散らばる手書きの事業計画書（草案）を気合を込めて手に取る。目の奥に灯った熱は、舌に残る辛味のせいにした。

甘い木の匂いに、僕の頭めがけて降ってくる暖かな風。まるで春のようだと思った。

「あのね、相談があるの」

目の前に座る萌絵の表情が、急にわざとらしく真剣になった。いじる手を止めてスマホをテーブルの隅へと置くと、身を乗り出すように座り直した萌絵が意を決した様子でこう言った。

「好きな人ができたの」

「またか」

この会話をするのもう何回目だろう。

「ちよっと！ またかつてなによ！ 今回こそは本気なの」

「今回こそって……。で、どんな人なの」

萌絵は、身を振りながら顔を赤らめた。彼女は好きな人ができる度に、初めて恋をした幼い女の子のように恥じらうのだ。

「四組の笹岡くん。すっごく優しいの」

「萌絵って、ほんとに惚れやすいよな。それから？」

「それからって？」

「僕に何か頼みたいことがあるんでしょ」
もう何十回目のくだりだ。打ち明けるだけでは終わらない。

「さすが卓也！ 実は一っだけ頼みたいことがあって……」

ここまでの流れは想定内だ。彼女が僕をこのお店に誘ったときから薄々感付いてはいた。

ここは、よく二人で来るショップカフェ。鯖江市の市境に佇む、こじんまりとした構えのお店だ。店内の壁も床も机も暖かそうな木でできている。僕と萌絵は幼稚園からの幼馴染で、高校生になった今でもその仲は続いている。

「明日はバレンタインでしょ。だから萌絵、笹岡くんにはプレゼントしようと思って」

「手作りのチョコ？ いいんじゃない」

「ありきたりなこと言わないで。笹岡くんはモテるんだから、みんなと変わらないチョコなんかあげたって駄目なの。そんな考えは甘い」

げ、始まった。意外に、でもないが萌絵はかなり面倒くさい。

「第一、アメリカでは男性がプレゼントをするのよ！ なんで日本は……」

「分かったから。それで僕は何をすればいいの？」

「ラブレターの内容を一緒に考えてほしいの」

女性の店員が、頼んであったケーキと飲み物を運んできてくれた。この店で使用されている食器は、鯖江でつくられた越前漆器。金箔が散りばめられた黒く塗れたように光る漆器と洋風

のケーキ。一見、ちぐはぐに思えるような組み合わせでも妙に合っている。ケーキは日替わりで、今日はきつね色の濃厚チーズケーキだ。

「今時ラブレター？ ラインでいいんじゃない？」

「この時代だからこそラブレターなの！ 私の笹岡くんへの思いは電波に乗るようなそんな軽いものじゃないわ。手書きじゃなきゃ意味ないの」

そう言うところ、萌絵はピンク色の革のバッグから、これまた淡いピンク色の便箋を取り出した。

「え！ ここで書くの」

「いいでしょ。それで、最初は何から書き始めればいいと思う？」

ラブレター。そういえば僕は一度も書いたことがないな。

「直球に何で好きになったか書いたら」

「それいいかも！」

萌絵はペンを取り、すらすらと手を動かし始めた。僕はホットコーヒーをすすりながら、彼女の文字を目で追った。どうやら自動販売機の下に転がってしまった百円玉を、その笹岡とかいう男が這いつくばりながら取ってくれたのがきっかけらしい。相変わらず恋愛の沸点が高い。

『あの時、制服を汚してまで私を助けてくれた笹岡くんにとっても感謝しています。』

「あれ、萌絵の一人称『私』だったっけ？」

「ふん。わざとに決まってるでしょ。笹岡くんは大人しくて知的な女の子が好みなの」

一体どこからの情報だ。自分を偽ったっていつかボロが出る。それよりも、ありのままの自分を受け入れてくれる人を萌絵は探すべきではないのか。恋愛がしたいくせして、彼女は自分に興味のなさそうなヤツばかりを追いかける。一番近くで萌絵のことを大切に思っている人がいるとも知らずに。

『その時から私は、だんだん笹岡くんに惹かれるようになりました。もしよければ、なんて言いません。私は笹岡くんを誰よりも幸せにすることができます。だから私と』……。ねえ、今回こそ上手くいくかな。今回こそ本物だと思う？　ねえ、卓也……」

萌絵の顔は憂いを帯びていた。

「萌絵、だんだん分からなくなってきた。どうして萌絵は一人の人とずっと一緒にいけないのかな……。運命って本当にあると思う？」

「ちよっと、いきなりどうしたんだよ。さっきまで笹岡のこと考えて舞い上がってたじゃないか」

「マリッジブルーならぬ恋愛ブルーよ。ふと考えちゃうの。今までの私の恋愛は何だったんだろうって。今までその人に費やした時間も思いもすべてが無駄だったとは言わない。だけど、その時は『この人と一生一緒にいたい』ってほんとに、ほんとに本気でそう思ったのになんだか呆気ないなって」

「ふっ」

思わず笑ってしまった。一生一緒。そんな言葉は口にするだけ安っぽくなる。それに、一人の人をずっと好きでい続けるのは思いのほか難しい。

「なに笑ってんのよ」

「いや、考えすぎだなって」

「そうよね。だって卓也は女の子を好きになったこと、一度だつてないもの。萌絵にそういう相談したことないし。片思いの辛さを知らないなんて、ある意味かわいそうね」

「……そうだね。僕は本当にかわいそうだ」

ほんと、損な役回りだ。

「ほら、ケーキ食べなよ。アイスコーヒーも水が溶けてきているじゃないか」

萌絵のアイスコーヒーが入ったグラスの表面からは、水滴がいくつも流れ出していた。

二人、無言でチーズケーキをつつく。濃厚すぎるそのケーキは口の中でもったりと溶けていった。ケーキの感想を言う間もなく、萌絵はまた手紙に文字を並べ始める。

「映画に誘おうと思うの」

また唐突だな……。

「それ、バレンタインの手紙に書くことなの？ 直接誘ったら」

「いいのよ！ ついででしょ、ついで」

なんでも詰め込めばいいってもんじゃないだろ……。

好きな人に手紙を送ることは、とても勇気のいることだと思う。手紙をもらった笹岡はきつと萌絵を意識し始めるだろう。積極的な女の子だな、なんて思ったりもして。でも、僕は知っている。本当の彼女は人一倍臆病だつてこと。直接伝えられない言葉を、彼女は手紙に託しているのだ。ラインを使わないのは、きつと打った文字が光の速さで相手に届いてしまうから。僕だけが知っている萌絵。人は彼女を能天気だとよく言うけれど、とても傷つきやすい女の子だということ僕だけは分かっている。

「僕はずっとそばにいるから」

「え？」

「いまやつてる映画のセリフだよ。映画、誘うんだろ。二人で行くなら恋愛ものは外せないよな」

「そうよね！ 分かっているじゃん卓也」

表情がほころび、また萌絵はペンを動かし始めた。

『「今度、もしよかったら一緒に映画を見に行きませんか？ 私はお昼休み毎日図書室で本を讀んでいるので、お返事はその時お聞かせください。待っています。小西萌絵』」

「どうやらやっと手紙が出来上がったようだ。萌絵は手紙を慎重に二つに折って封筒に入れたかと思うと、あからさまなハート型のシールを取り出して、指の圧をこれでもかという程強くして貼り付けた。その手紙は明日、笹岡の元へ届けられるそうだ。」

会計を済ませ店の外へ出た。冷たい空気が一気に体を包む。二月の気温は身が凍るように厳しい。五時を過ぎるともうだいぶ暗くなる。空を見上げると、いつものように北極星が輝いていた。

「寒いね」

「うん、寒い」

これだけでも幸せなことじゃないか、と僕は思った。手を一緒に温め合うことはできなくても、隣にいて、同じ空を見上げて、返事が返ってきて。もう十分すぎるくらい僕にとっては幸せだ。

「うまくいくといいね」

「そうね」

「もしだめだったら、また話きいてあげるよ。僕は昼休み毎日教室にいるからいつでもおいで」

「ふふ。ありがとう」

彼女のやわらかな笑顔を見守って、小さくため息をついた。吐き出された白い煙は僕の気持ちと混じりあい、萌絵に気づかれることなく暗闇の中へと消えていった。

『好きだ』のたった三文字。もうちよつとの間あたたためていよう。